
超自然的恋愛成就

Mr.あいう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超自然的恋愛成就

【Nコード】

N9139H

【作者名】

Mr. あいう

【あらすじ】

「星を見に行こう！」と突然叫んだ私の幼馴染高坂に連れられて星を見に行った私なのだが・・・

「星を見に行こう!」

「・・・・・・え?」

文芸部の狭い部室（ほぼ暇をつぶすだけの部屋だが）で突然立ち上がったIQの低そうな顔をした少年はそういった。

あ、これ高坂君。うちの幼馴染。

「おい山岸、そんなことを言ったら僕が毎回テストで学年順位十位以内にいて、しかも新入生が入ってくるたびに二桁の数の告白をされているという事実がまったく信じてもらえなくなるじゃないか」

そうなのだ、この高坂という少年は頭がいい。顔がいい。

ゆえに、新入生はだまされてしまうのだ、この性格が残念な高坂という少年に。

「んで、そんなことをいって新しくできた彼女の何やらちゃんほつといていいの?」

「ああ、真弓さんか。うん、なんか初デートで僕の大好きな朝市に連れて行ったらふられた。それも市場の皆さんの目の前で」

さて、初デートで待ち合わせ時間を午前九時にセッティングされた拳句、どんなロマンチックなところに連れて行ってくれるのかと思いきや生臭いにおいとうつろな目をした魚でいっぱい魚市場に連れて行かれた女の子の気持ちになって考えてみよう。

鉄拳制裁が妥当だろう。

「ヤマチャンパーンチ!!!」

「ウグア・・・」

うわぁ、結構マジな声を上げた。しかもなんか涙目だ。

「あ、あの、なんか・・・大丈夫？」

「う・・・ん。話を戻そうか」

丈夫な奴だ。それでも私、合気道二段なのに。

「うん。ああ、それでなぜたった二人であってしかも一応名義上文芸部で天文部ではない私らがなぜわざわざ星を見なきゃいけないわけ？」

「いや、なんか見たくなったからだ・・・」

なぜ照れる。下心があるということがバレバレじゃないか。
二人つきりで暗いところでなにをする気だ。

と、ほかの奴が言ったならそう思うだろう。
だけでもまあ、ほかでもない高坂だし。
万が一襲われても高坂ならぶちのめせるし。
それに・・・

「うん、まあいいや、付き合っただけ」

「ホントか！そういうところが山岸が山岸であるゆえんだな！」

こいつは結構落ち込みやすい奴なのだ。

ふられた後くらい付き合っただけでもいい。

………とは思ったのだが。

「まだかな！もう一時間は歩いたよ！」

「おお、もうそんなか」

午後五時から上らせてもう六時だ。

いくら近所の裏山だからといってもどれだけ山道を登らせれば気がすむのだろう。

ほんとに私を疲れさせて襲うつもりじゃないんだろうか。

「方向あつてるの？」

「うん、まあ一応」

一応ってなんだよ。ほんとに嫌だぞ。山の中で高坂と二人のたれ死になんて。

「お、ああ見えてきた、こっちだこっち」

なんか高坂がめっちゃ手をふっている。どうやら展望台に出たらし

い。

かといってスピードを上げる気力も残ってはいない私はそのままのスピードで歩いていく。

するとそこに広がっていたのは・・・

「うわぁ・・・」

流れ星だ。それも一個や二個じゃない。

まるで星空がやけになっているかのような大盤振る舞いだ。

「このきれいな星空を前になんて比喻をしているんだ」

と、展望台のベンチに寝転がっている高坂。

「これを見せたかったんだ」

そついう高坂は自分の隣のベンチをポンポン叩いていた
屋根がない展望台は星を見るのに絶好の場所だ。

そう思つて、私は高坂の隣に寝転がった。

・・・しばらく二人して横になっていた。

やがて、おもむろに高坂が口を開いた。

「なあ、山岸、山岸、山岸ッ！」

この空の下無粋な奴だ。

ほっところかとも思っ たがなにしろうるさい。

「何、高坂」

「こつ見えても俺は早口言葉に結構自信があるんだ」

「おお、それで？」

「もし流れ星が消える前に俺が願い事を三回言えたら、どうだろう、山岸。君が願いをかなえてくれないか」

「流れ星、もしくは神様に頼めよ」

「いや、山岸。君にかなえて欲しいんだ」

いつになく真剣な高坂の声。顔までは見えないがどんな顔して言うてるんだろう。

まあいいや。どうせ無理だし。

「うん、いいよ、かなえたげるわ」

「本当か！よし、武士に二言はないぞ」

私武士じゃないんだけど、と突っ込もうとしたところで私は夜空に奇妙なものを見た。

流れ星っぽいが明らかに流れ星じゃない。

いや、ジグザグ走行する流れ星がもしかしたらあるのかもしれない
しないのかもしれないしああもしかしたらアレが俗にいう未確認飛
行物体って物じゃないのかしら。

よし、高坂に聞いてみよう。

隣で高坂は立ち上がった。いた。

マジで三回言おうとしているらしい。

「ねえねえねえねえねえ！高坂高坂高坂高坂！」

「何だ騒々しい、武士じゃなくとも二言はないぞ」

「そうじゃなくれあれらよ！」

「ん、今なんていったんだ」

ああもうしたがうまく回らない！

面倒になって私は高坂の首を持ってグキッ！と上を向かせた。

「痛ったっ！なにをする山岸！親しき仲にも何とやら……………」

「……………あれなんだけど」

「おお……………あれか」

「UFOってやつなの？」

「・・・・・・・・・・いや、流れ星だろ」

いやアレどう見ても違つたろ何で流れ星が酔つ払つてゐるんだよと言おうとしたところで、

こいつは、高坂はこんなことを言いやがった。

「・・・・・・・・つまりアレが消える前に願い事を三回言えればいいわけだ」

「え？」

そういつて高坂は思いつきり息を吸い込んで、なにを言うかと思つたら・・・

「・・・・・・・・・・が好きだ」

「え？」

なんで思い切り息を吸い込んでこいつこんな音量なんだろう？

つてかいまこいつなんていったの！？

なんかものすごく聞きたくないしでも聞いてみたい気もする！？

とか思つていたら今度は普通の音量で。

「山岸が好きだ」

・・・うつそなんでなんでなんで？
ジョーク？アメリカンジョーク？

て言うか今こいつ二回目だよねいったの？

まずいマジで早く消えてなくなれUFO！！！！

最後はマジUFOに聞こえんじやないかというくらいの大声で。

「山岸が好きだーーーー！」

願いを三回言い終えてからもまだその辺をうろろろしていたUFO
を、

しばらく二人ですつと見つめていた。

やがてUFOが消えてから、私はようやく思っていたことを言った。

「というか、願い事じゃないじゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ！！！！！！！」

マジで頭を抱えて落ち込む高坂を見ながら私は考えた。

頭がよくて

顔がよくて

性格がだめだめ

頼まれると断れなくて

落ち込みやすくて

刺身が大好きで

どこか憎めないこいつに

一回くらいならだまされてもいいかな、なんて。

だから私はいつものように、笑顔でこういつてやるのだ。

「うん、まあいいや、付き合っただけ」

こんな突拍子もない恋愛成就も、あるんだろうな。なんて思いながら。

（後書き）

恋愛物を書いてみたかったのですが、
なんかSFっぽくなってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9139h/>

超自然的恋愛成就

2010年10月10日02時11分発行